

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月7日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22653019

研究課題名（和文） 東アジア軍事最前線の溶解と再生—金門島研究—

研究課題名（英文） DE-MILITARIZATION AND RECOVERY OF JINMEN ISLAND

研究代表者 川島 真

(KAWASHIMA SHIN)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：90301861

研究成果の概要（和文）：

本科研では、金門島に注目し、僑郷、冷戦の最前線、そして中国・台湾の两岸交流の前線へと姿を変えたその歴史について、内在的視線から明らかにすることを目的としてきた。二年間の研究活動を通じて多くの成果を得たが、たとえば、僑郷としての特徴が冷戦期からポスト冷戦期に変容しながらも通底するさまを、長崎や神戸華僑と関連付けながら理解することができ、また金門大学やハーバード大学などの金門研究者との研究協力ネットワークを形成することができた。

研究成果の概要（英文）：

This project focuses on Jinmen island which has unique history-- mother island of overseas Chinese, frontier of cold war (hot war), and frontier of exchanges at Taiwan strait between PRC and ROC--, and explores its process of change and continuity from the local point of view. Through two years' research, this project gains fruitful materials and perspectives, for instance, it is made clear that the element of mother island of overseas Chinese continues until now, with some changes, by the cases of Nagasaki and Kobe. And this project successfully forms academic network with researchers of Jinmen studies in the world.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	0	1,100,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,100,000	300,000	2,400,000

研究分野：

科研費の分科・細目：国際関係論

キーワード：金門島、僑郷、冷戦の最前線、两岸交流、中華民国福建省、国民党、小三通、金門国家公園

1. 研究開始当初の背景

金門島周辺は、東アジアの冷戦(熱戦)、中華人民共和国と中華民国(台湾)の対立の最前線

であった。だが、世界的な冷戦の崩壊、地域的緊張緩和につれ、軍事最前線としての性格を次第に喪失し、現在ではむしろ中国と台湾

の交流の最前線となりつつある。またこめ過程で、観光に頼る典型的離島経済の様相を示しながらも、かつての僑郷(華僑の輩出地)としての歴史も取り戻し、中国とも台湾とも異なるアイデンティティを形成しつつある。このような金門島の独特の歴史過程は、世界史、東アジア史、中国史など、さまざまな歴史が凝縮したものだともいえ、同島にはさまざまな歴史的な要素が折り重なった状態にあることが予想された。そのため、申請者は10年ほど前から同島をしばしば訪れ、共同研究の機会をうかがってきた。

金門島研究は、この5年で大きく展開している。その中心は、国立金門技術学院の江柏煒副教授である(http://arch.kmit.edu.tw/sf/05teacher_02.htm 1.)。またハーバード大学の Szonyi, Michael が冷戦下の小金門の状況をまとめて成果を出版し注目を集めている(*Cold War Island: Quemoy on the Front Line*, Cambridge University Press, 2008.)。日本国内では、申請者が2005年以来、金門島にて江教授との協力の下でフィールドワークをおこない、2007年の日本台湾学会研究大会で江教授とともに金門研究のセッションを開いたのが(一部の華僑研究を除いた)嚆矢であろう。以後、当該テーマの研究を続け、今年度の『地域研究』では、申請者は、江および Szonyi, Michael とともに、本科研申請以前に、金門学の現在という特集を組むことが決まった。

申請者の関心は、他の中国南東の沿岸部と同様に僑郷としての性格をもつ金門が、冷戦下でアモイと引き離されて軍事最前線下で要塞化し、台湾とも異なる歴史を歩みつつ、1990年代前半に戒厳令が解かれて「自由化」していくに際して、軍事最前線から中国と台湾の交流の最前線になりつつ、歴史を基礎にした独自のアイデンティティを形成していくという歴史のダイナミズム、そしてそこに見られる新たな国際関係、地域間関係を析出することにある。

2. 研究の目的

金門島周辺は、東アジアの冷戦(熱戦)、中華人民共和国と中華民国(台湾)の対立の最前線であった。だが、世界的な冷戦の崩壊、地域的緊張緩和につれ、軍事最前線としての性格を次第に喪失し、現在ではむしろ中国と台湾の交流の最前線となりつつある。またこの過程で、観光に頼る典型的離島経済の様相を示しながらも、かつての僑郷(華僑の輩出地)としての歴史も取り戻し、中国とも台湾とも異なるアイデンティティを形成しつつある。このように、金門島周辺は、東アジアの国際政治、安全保障をめぐる最前線である。

本研究では、東アジアの国際政治の変容過程に関連した/関連しない、金門島内部の変容過程を、現地や他国の研究者との協力体制の下で、文書研究とフィールドワークを通じて把握し、より大型の科研に繋げることを目的とする。

3. 研究の方法

平成22年度には、国立金門技術学院の江柏煒副教授、ハーバード大学の Szonyi, Michael 教授と連絡を採りつつ、この150年の金門島の置かれたダイナミズムについて僑郷としての歴史・軍事最前線としての冷戦・交流の最前線という三部に分けた見取り図を描き、すでに資料収集が終わっている歴史部分については分析を継続し、冷戦部分以後については、金門島での聞き取りを開始する。珠山村を中心に、冷戦期の金門、そして1990年以後の状況などについて聞き取り調査をおこなう。また必要に応じて、海外の金門出身者にも調査をおこなう。具体的な研究計画は以下の通り。

平成22年度

[1]研究体制の形成

平成22年夏に国立金門技術学院の江柏煒副教授との間で、経費に即して二年間の研究計画をフィールド対象、時期などをも含めて詳細に練り、珠山村、金門県政府、金門日報社などを訪問して、二年間の研究計画を伝えて協力要請を再度おこなう。現在のところ、台北における文献調査(二回、国立政治大学=移民先のルソン島の華字新聞の調査、国史館に一部所蔵されている金門県政府档案、また兩岸関係に関する档案を収集する)。フィリピンなど、東南アジアの金門会館については、今回の研究対象には特に含めないが、文献ベースでそれらの会館の刊行物も可能な限り収集する。

[2]調査計画

(1)第一課題【僑郷としての歴史部分】

『顕影』(1928-1949年)に基づく珠山村の歴史叙述をおこない、論文などとして公刊する。江柏煒「僑刊史料中的金門(1920-40s): 珠山《顕影》(Shining)之考察」(『人文及社会科学集刊』17巻1期、中央研究院人文社会科学中心、2005年3月)や僑報に対する先行研究をふまえ、インタビューに加えて複数の史料をつきあわせながら歴史叙述をおこなう。2008年夏の珠山への表敬訪問の際にも村長に対して、また2008年12月の珠山村の祭礼(一族の集まる機会)の際に一週間滞在してインタビュー調査をおこなう。他方、夏に台北の

国立政治大学図書館にて、移民先であるルソンの華字新聞、また国史館の中国のマニラ総領事館の文書を閲覧する。日本占領時代（1937-1945年）については、防衛庁戦史史料室、外務省外交史料館などにて調査をおこなうが、アヘン栽培などを含め、基本的に聞き取りを中心としておこなう。僑報や金門島民の移動については、兵庫県立大学の陳来幸教授のご協力を得たい。初年度は、この第一課題を終えることを目標とする。このほか、東南アジアに展開している金門出身者へのインタビューを含めた調査については、可能であれば実施したいが、江教授の成果に依拠したい。

平成 23 年度

平成 23 年度は第二、第三課題の研究を進め、またシンポジウムを開催するとともに、基盤研究等の申請に結び付けていく。

(2) 第二課題【冷戦・中台対立部分】

金門島の戦時動員体制に関する先行研究は決して多くない。あるとしても、中華民国国防部が刊行した、軍人による 823 戦役の従軍記録や『金門県志』

(<http://ebooks.kmccc.edu.tw/ebooks/>)にある概要程度である。本研究では、こうした従軍記録、また政府レベルの档案史料も用いるが、1950年代から金門島で公刊され続けた『金門日報』という新聞、また金門県政府の出した法令、制定された諸制度などをサーヴェイし、それとともに珠山村を中心としたインタビューをおこなっていく。特に、島民に課せられた移動や経済活動に関する諸制限、島民が組織した（男女双方の）自衛隊、各村落到に駐屯した軍と村の自治の関係などを明らかにし、その上で 1980 年代後半以降のその体制の弛緩過程についても明らかにしていく。平成 22 年度は上記の(1)を中心にこなすが、珠山でのインタビューと『金門日報』での閲覧、国史館での档案調査、従軍記録の収集（多くは図書館ではなく、古書店に流出している）をおこなう。

(3) 第三課題【小三通と兩岸交流】

平成 23 年度は、1990 年代前半の戒嚴令解除から離島経済に移行していく時期、そして 2001 年の民進党政権により実施された兩岸交流と金門の関わりについて検討する。特に、小三通によって金門からアモイへの渡航が認められたことはきわめて重要であったに違いない。まずはこの兩岸交流の状況を数字の面で把握し、珠山などでインタビューをおこなって交流の状況や金門意識の形成について検討する。そして、県知事や議会経験者にインタビューするなどして、金門における特区構想について聞き取りする。なお、金門島の出身者の華僑らのドネーションの状況、

教育現場でのドネーションの意義などについては、国立金門技術学院および金門高校をターゲットにして実施する。

[3] 国際シンポジウム／ワークショップの実施

国立金門技術学院の江柏煒副教授およびハーヴァード大学の Szonyi, Michael 教授との会議を開催し、この 150 年の金門と、国際環境の間の相互関係や相違についての知見を練り上げる。これは『地域研究』（2010 年刊行）における特集の内容を発展させたものとなることを期待され、可能であれば、英語の雑誌などで公刊する。また、この成果を踏まえて、基盤研究、あるいは内外の民間の財団でのより大型の共同研究として申請していくことを視野に入れた協議もおこなうものとする。

4. 研究成果

第一年度は、研究体制を構築するとともに、研究の面では僑郷の時代に重点を置き、『地域研究』（第 11 巻 1 号、2011 年 3 月）にて、「金門島特集」を、研究代表者を企画者として編んだ。ここには、川島真「地域研究の対象としての金門島」（『地域研究』11-1. 7-16 頁、(2011)、査読なし）のほか、僑郷の関する、川島真「僑郷としての金門—歴史的背景」（『地域研究』11-1. 43-61 頁 (2011)、査読あり）、さらに冷戦期について、江柏煒、M. Szonyi による論文が掲載された。また、神戸華僑商会にて神戸の金門出身者の華僑とともに、「金門島研究の現在—僑郷・軍事・兩岸—」を開催した。そこでは、川島真「僑報『顕影』再読—1920-40 年代の珠山と移民先の関係」、国際ワークショップ「金門島研究の現在—僑郷・軍事・兩岸—」(20110212)、神戸華僑歴史博物館のほか、国立金門大学の江、さらに神戸県立大学の陳来幸らが報告し、神戸の金門出身華僑と金門島との関係性、歴史性が確認できた。このほか、福建省廈門の金門出身者の組織で調査をおこなった。彼らは、戦後、東南アジアで華僑迫害がなされた際に東南アジアを離れたものの、軍事最前線となっていた金門への帰還を避け、対岸の廈門などに居を構えた人々である。そして、現在では彼らが、金門と中国大陸の交流の窓口になっている。

第二年度は、冷戦期の状況および兩岸交流を主題とし研究を進めた。2011年7月に、中華民国福建省などの主催で開かれた「福建省金馬 歴史回顧與展望學術研討会」に参加し、「高峰対話：国際地縁政治、民国史與金馬地位」のパネラーとして、僑郷の時代から現在に至る金門史の長期波動を、ハーバード大学の Szonyi 教授、国立金門大学の江教授とともに論じた。報告論文は、川島真「金門近代史

上之連続與断絶—以僑郷因素的変遷為例的初歩探討」(「福建省金馬 歴史回顧與展望學術研討会」2011年7月22日、国立金門大学、である。この時の発言内容は、「川島真：金門具有『僑郷』代表性」(『金門日報』、2面〈金門要聞〉、2011年7月23日)として地元紙にも掲載された。また、12月には金門島西部の珠山における冬至の祭祀を見学し、村長らから聞き取りをおこなうとともに、そこにおける兩岸交流(この村の母体であった福建の郷村の人々が訪問)の在り方を検討した。そして、金門大学の協力の下に、最近発見された冷戦期の戦争遺跡を見学した。2012年3月には、長崎にて「長崎華僑の故郷—金門島—国際ワークショップ」を開催し、長崎県立歴史博物館の協力の下、金門出身の長崎華僑と金門大学の金門研究者との意見交換をおこなうとともに、近代における長崎と金門の関係と現代以降の変化などについて議論を深めた。

以上の成果によって、所期の目標を達成できただけでなく、国立金門大学、ハーバード大学などの金門研究者とのネットワークを深めるとともに、日本国内の金門出身華僑との連携を深めることができた。ただ、現状部分については小三通の実態も含め、調査が行き届いていない点もある。これは平成24年度に自費で調査を継続する予定である。その成果をふまえ、今後、これらの関係を基礎に大型科研の申請を期したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

川島真「地域研究の対象としての金門島」(『地域研究』11-1. 7-16頁、(2011)、査読なし)

川島真「僑郷としての金門—歴史的背景」(『地域研究』11-1. 43-61頁(2011)、査読あり)

川島真「金門近代史上之連続與断絶—以僑郷因素的変遷為例的初歩探討」(江柏煒主編『福建省金馬 歴史回顧與展望學術研討会論文集』中華民国福建省政府、2011年、15-32頁、査読なし)

川島真「金門島—中国の内なるフロンティア(上)」(『UP』469号、2011年、32-42頁、

査読なし)

川島真「金門島—中国の内なるフロンティア(上)」(『UP』471号、2012年、22-30頁、査読なし)

〔学会発表〕(計3件)

川島真「僑報『顕影』再読—1920-40年代の珠山と移民先の関係」、国際ワークショップ「金門島研究の現在—僑郷・軍事・兩岸—」(20110212). 神戸華僑歴史博物館

川島真「金門近代史上之連続與断絶—以僑郷因素的変遷為例的初歩探討」(「福建省金馬歴史回顧與展望學術研討会」2011年7月22日、国立金門大学)

川島真「趣旨説明」(「長崎華僑の故郷—金門島—」国際ワークショップ、2012年3月15日、長崎県立歴史博物館)

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.kawashimashin.com/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

川島 真 (KAWASHIMA SHIN)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：90301861

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：